

論文

両晋時代の故吏と行政

野 田 俊 昭

はじめに

魏晋南朝の故吏・門生をめぐっては、故吏と旧君の間、門生と師との間に見られる私的情誼関係、それは恩恵と報恩という恩義関係に集約されようが、そうした関係が、当該時代の歴史の流れのなかでどのように機能し、またどのような意義をもつものとして理解すべきか、ということが問題とされている。

川勝義雄氏は上述の観点から、当該時代における故吏・旧君、門生・師間に見られる私的情誼関係の具体的諸相を詳細に考察し、この関係のありようのなかに魏晋南朝という時代のもつ特性を見いだそうとした。周知のように、その意図するところは当該時代に封建制的要素を見いだそうとするものであった。

さらに川勝氏は、こうした私的情誼関係が時代を下るとともにその強固さを増し、王法一天子の支配権力と言い換えてもよからう（以下同様）— に対してさえもその存在をより強力に主張するようになったということも指摘している⁽¹⁾。

さて、いま問題を門生と師の間のそれについては暫くおき、故吏と旧君の間の私的情誼関係のありよう如何ということに絞った際、越智重明氏にも言及がある。すなわち越智氏は、まず西晋時代に故吏の旧君に対する服喪が制度化されたこと、東晋時代になると、西晋時代に比して、故吏の旧君に対する服喪の実情が制度の規定よりもようやく軽くなる傾向にあったことを指摘し、さらに南朝、とくに宋時代になると、西晋時代に制度化された故吏の旧君に対する服喪制度の根幹部分

が天子によって否定されることとなったとし、その大勢は後代にも引き継がれたこと、さらには南朝になると、故吏・旧君関係はむしろ否定すべきものとする認識を当時の人々がもつようになったとするなどの見解を示している⁽²⁾。

川勝氏の見解は故吏と旧君の関係の間に見られる私的情誼関係も含めたかたちで、私的情誼関係一般が時代が下るとともに、王法に対してさえも、むしろその存在をより強固に主張するようになったとして把握しているものとされよう。

一方越智氏の見解では、少なくとも故吏と旧君の間に見られる私的情誼関係は、時代が下るにしたがってより希薄なもとなるものとして把握されていることになろう。

以上のような見解の相違を背景としてのものであろう、川勝氏と越智氏の間では、東晋南朝における私的情誼関係一般に対する王法の対応のありようをめぐる理解にも、当然のことであろうが、差異が生じている。

『晋書』卷九八王敦伝に、東晋時代のこととして、

是において、(王敦)の瘞を發し尸を出し、其の衣冠を焚き、跽して之を刑す。敦・(沈)充の首、同日南桁に懸く。……尚書令郗鑒、(明)帝に言つて曰く、「……前朝、楊駿を誅するや、皆な先ず官刑を極め、後に私殯を聽せり。……魏武、王脩の袁譚を哭せるを義とす。斯れに由りて之を言え、王誅上に加わり、私義下に行なわる。臣以為えらく、私葬を聽すべし。義において弘と為す」と。詔して之を許す。是において敦の家奴収め葬る。

とあり、『南史』卷二九蔡興宗伝に、宋時代のこととして、

竟陵王誕、広陵に抛りて逆を為す。事平らぐ。……(蔡)興宗、旨を奉じ、広陵を慰勞す。州の別駕范羲、興宗と素より善し。城内に在りて同じく誅さる。興宗至り、躬自ら収殯す。喪を致して豫章の旧墓に還えす。上(孝武帝)聞き、謂いて曰く、「卿、何ぞ敢えて故らに爾く網に触る」と。興宗抗言し、答えて曰く、「陛下自ら賊を殺せり。臣自ら周旋せるを葬る。既に嚴制を犯せり。

政に当に斧鉞に甘んずべきのみ」と。

とある。このふたつの記事をめぐって、川勝、越智の両者の解釈には、重要な点で相違がみられるのである。

すなわち、川勝氏はすでにふれたように、

このように魏の末から晋代になると、親族朋友の情誼や故吏と故主（旧君＝筆者）との恩義関係の行われる世界は私義の世界として、王法の及びうる埒外に置かれることになった。

とし⁽³⁾、さらに

晋以降になるともはや王法は私義の世界に貫徹することを断念する傾向がみられ、王法の貫徹力が次第に減少して、私義の世界、いわば慣習法の世界が強くなっていった。

と解釈している⁽⁴⁾。一方越智氏は、

・・・支配者が王法を上におき、その王法が行われたあとで、任侠的習俗としての私情が下に行われることを、その私情が王法にふれるところをもつものであっても（つまり、王法が始めからその私情を包みこめないものであっても）、現実の政治に直接的な大きい影響がない限り認める立場をとることもある。これは矛盾というよりも、一種の支配の「方便」として考えるべきである。

と解釈している⁽⁵⁾。

このように、まったく同じ史料を分析の対象としているのにもかかわらず、一方では、王法の私的情誼関係への貫徹の断念を説くのに対して、一方では、あくまでも王法を私的情誼関係の上位に置いて解釈し、王法の下に私義の世界の存在を許すのは、支配のための「方便」にすぎないとするわけである。

小論では、以上の両者の見解を意識しつつ、主として越智氏が西晋及び東晋時代の故吏の旧君に対する服喪について示す見解について検討を加える。

越智氏は、西晋時代に比して東晋時代になると、故吏の服喪の実情がようやく

制度の規定より軽くなる傾向にあったとして把握するが、このように把握することには無理があるのではないかと思われることについてまず述べ、さらに、それに付随するいくつかの問題にも言及することとしたい。

なお越智氏が、南朝における故吏の旧君に対する服喪などについて示す見解についての検討は、これをすべて別稿に譲る。

いうまでもないが、故吏とは州郡県の長官や府を開くことを許された特定の大官に召し抱えられて吏となった経歴のある人で、その長官が死んだり、転任またはその他の理由でその長官のもとを去った人であって、これがもとの主（これを旧君と称する）に対して故吏と呼ばれる⁽⁶⁾。

なお以下、越智氏がその論旨を展開するに際して、その中核としたと思われる史料については、句読などをふくめて、できるだけ越智氏の論文に引用されたままのかたちで示し、他の史料については書き下しする。ただし、越智氏が引用するに当たって意をもって補った部分、あるいは恐らく転写を誤ったと思われる部分などについては、注記してそれを示すことにする。

（越智氏がその論を展開するに当たって中核とした史料は『通典』から引用されたものがほとんどであるが、小論では中華書局版『通典』に依拠することとする）

一．魏晉南朝の故吏の行動

魏晉南朝の故吏の行動については、故吏としての行動の典型的なものとして、旧君が王朝から誅殺されたり、あるいは賊によって殺されるなど尋常ではない最期を遂げたとき、故吏であるものが、その殯葬に奔赴するという事例がよく挙げられている⁽⁷⁾。以下小論でも、故吏の典型的行動として、こうした故吏の行動を中心にとりあげ、その様相を以下の考察に資する意味から概観しておくことにし

たい。

『後漢書』卷三七桓典伝に、これは後漢末のこととして、

（桓）典，字は公雅，・・・（王吉によって）孝廉に挙げられ郎と為る。居ること幾ばく無くして，国相王吉，罪を以て誅さるるに会う。故人親戚敢えて至る者莫し。典，独り官を棄て収斂して，帰葬し，喪に服すること三年，土を負いて墳を成し，為に祠堂を立て，礼を尽くして去る。

とある。ここに「故人」とあるが、そこには故吏もふくむべきものとなろう。「独り」という文言を重視すると、さらに王吉には、幾人かの故吏がいたことを想定すべきであろう。そうするとこれは、王吉の幾人かの故吏のなかで桓典だけが、独り王吉の為に殯葬に奔赴し、その喪に服したことを示したものとなろう。

つぎに『晋書』卷三九荀勖伝に、魏時代のこととして、

（荀勖）魏に仕えて、大將軍曹爽の掾に辟され、中書通事郎に遷る。爽の誅せらるるや、門生故吏、敢えて往く者莫し。（荀）勖のみ独り臨赴し、衆乃ち之に従う。

とある。これは曹爽の（門生）故吏のなかで、荀勖が意を決して独り殯葬に臨赴するまで、他の（門生）故吏のだれも臨赴することがなかったことを示すものであろう。『晋書』卷五七馬隆伝に、同じく魏時代のこととして、

魏の兗州刺史令狐愚，事に坐して誅に伏す。州を挙げて敢えて収むる者無し。

（馬）隆，武吏なるを以て愚の客と託称し，私財を以て殯葬し，喪に服すること三年，松柏を列植し，礼畢りてすなわち還る。一州以て美談となす。

とある。兗州刺史たる令狐愚には馬隆以外にも幾人かの故吏がいたことを当然想像すべきである。そうするとこれは、馬隆以外、そうした故吏の誰も令狐愚を収斂することがなかったことを示すものとされよう。

さらに『晋書』卷五九長沙王乂伝に、これは西晋時代のこととして、

（前略）東海王越，事の済らざるを慮かり，潜に殿中將軍と（長沙王）乂を収

め金墉城に送る。・・・越，難作るを懼れ，父を遂誅せんと欲す。黄門郎潘滔，越に張方に密に告げんことを勧む。方，部将郅輔を遣りて，兵三千を勒し，金墉城に就きて父を収め，営に至りて，炙りてこれを殺さしむ。父の冤痛之声左右に達し，三軍これが為に垂涕せざるなし。時に年二十八。父，将に城東に殯されんとするも，官属の敢えて往く者莫し。故の掾劉佑のみ独りこれを送り，歩して喪車を持ち，悲号して断絶し，路人を哀感せしむ。張方，其の義士なるを以て，これを問わざるなり。

とある。これも幾人かいる九長沙王父の故吏のなかで，「故の掾属」であった劉佑，つまり故吏のなかで，劉佑のみが独り，旧君長沙王父の殯葬に身の危険を顧みず参加したことを示したものとなろう。

『晋書』卷七八孔祗伝に，これは東晋時代のことであるが，

（孔祗）太守周札，命じて功曹史と為す。札，沈充の害する所と為る。故人賓吏，敢えて近づく者無し。祗，刃を冒し号哭し，親しく殯礼を行い，喪を送って義興に還る。時人之を義とす。

とある。すでに述べたように，「故人」には故吏も含まれることがあることを勘案すると，ここの「故人賓吏」のなかには，必ずや幾人かの故吏が含まれていたであろう。そのように考えてさしつかえないとすると，これもまた，そうした故吏のうち，唯一孔祗のみが，独り殯葬を実行したものとなろう。また『宋書』卷四八朱齡石伝に，同じく東晋時代のこととして，

（朱齡石）弟超石，・・・桓兼，衛將軍と為り，（超石）を行参軍に補す。後に武帝（劉裕）の徐州の主簿と為る。桓兼の殺さるるや，桓兼の身と首とを迎え収め，自ら殯喪を営む。

とある。この場合も，幾人かいる桓兼の故吏なかで朱超石だけが，独り殯葬を実行したものと考えらるべきものであろう。

さらに『南史』卷二三王奥伝に，宋時代のこととして，

（王）奥既に誅さるるも、故旧の敢えて至る者無し。汝南の許明達、先に奥の参軍と為る。自ら殯斂を行い、經理すること甚だ厚し。当時、其の節を高しとす。

とある。この「旧故」の中には必ずや王奥の故吏が含まれているものされよう。そうすると、そうした故吏になかで唯一許明達のみが、独り旧君を殯斂したということが想定されよう。『宋書』卷九一孝義伝・龔穎に、同じく宋時代のこととして、

（龔穎）少くして学を好み、益州刺史毛璩、辟して勸学従事と為す。璩、譙縦の殺す所と為り、故佐吏並びに逃亡す。穎、号哭して奔赴し、殯葬するに礼を以てす。

とある。これも故吏としては龔穎のみが危険を冒して、旧君毛璩の為に奔赴し、殯葬を営んだことを示したものとされよう。（後文で、龔穎は毛璩の故吏とされている）

さらに『南史』卷二五桓崇祖伝に、南斉時代のこととして、
永明元年（四八三年）、詔して、「其れ（桓崇祖）荀伯玉と辺荒に構扇すと」称し、之を誅す。故人敢えて至る者無し。独り前の豫州の主簿の夏侯恭叔の家財を出して殯を為す有るのみ。時人之を欒布に比す。・・・恭叔、譙国の人なり。崇祖の豫州と為るや、其の才義を聞き、辟して主簿と為し、兼ねて書簡を掌らしむ。

とある。先に述べたことも併せ考えると、この記事からも「故人」という文言には、故吏を含むことがいよいよ明確になろう。また、桓崇祖の「故人」には夏侯恭叔以外の故吏も含んでいたと考えるのが至当であろう。そうすると、そうした故吏のなかで、唯一夏侯恭叔だけが、独りはるばる桓崇祖のために殯葬に臨んだことになる。『南史』卷五〇庾於陵伝に、同じく南斉時代のこととして、

齊の随王子隆、荊州と為り、（庾於陵を）召して主簿と為し、謝朓、宗夬と与

に群書を選ばしむ。子隆の代りて還るや、また送故主簿と為す。子隆、明帝の害する所と為り、僚佐、畏れ避けて至る莫し。ただ於陵と夬のみ独り留まりて喪事を理む。

とある。これは随王子隆の荊州時代の故吏のなかで、庾於陵と宗夬の二人だけが、はるばる都に至って子隆の葬儀を営んだことを示したものとされよう。

さらに『梁書』卷一一鄭紹叔伝に、梁時代のこととして、

（鄭紹叔）本州、召して主簿と為し、治中從事史に転ず。時に刺史蕭誕の弟誅殺され、台、収兵を遣りて卒に至らしむ。左右、驚き散ぜざる莫し。紹叔、難を聞き、独り馳せ赴く。誕の死するや、喪柩を待送し、衆咸な之を称す。

とある。これも幾人かいる蕭誕の故吏のなかで鄭紹叔のみが独り蕭誕の殯葬に奔赴したととるべきものであろう。

ところで『晋書』卷四八閻續伝に、西晋時代のこととして、

（閻續）太傅楊駿の舎人と為り、安復令に転ず。駿の誅さるるや、續、官を棄てて帰り、楊駿の故主簿潘岳、掾の崔基らに共に之を葬らんことを要む。基、岳、罪を畏れ、續を推して主と為す。墓成りて、当に葬とするに、駿の従弟の模、武陵王澹に告げて、将に評して造意の者を殺さんとす。衆咸な懼れ、冢を填めて逃ぐも、閻、独り家財を以て墓を成し、駿を葬りて去る。

とある。先に挙げた諸例ともあわせ考えた際、これは故吏が故吏としての行動を示すに際して、故吏各人それぞれで温度差のある場合のあることを示したものとなる。こうしたことがあるだけに、旧君のなかには故吏全員から旧君として遇されることの無いものもいたであろうことが、当然想定されることとなる。果たして『梁書』卷九曹景宗伝に、南齐時代のこととして、

（曹景宗）少くして州里の張道門と厚く善し。道門、齐の車騎將軍張敬兒の少子なり。武陵太守と為る。敬兒の誅さるるや、道門、郡に法に伏すも、親属故吏敢えて収むる莫し。景宗、人を遣りて船にて武陵に至り其の屍骸を収めしめ、

迎えて還り殯葬す。郷里之を以て義とす。

とあるが、これはそのことをよく示す。張道門は故吏全員からそっぽを向かれてしまったのである。

以上あげた事例から、魏晋南朝時代、旧君の死に際して、すべての故吏が故吏としての行動を示すものではなかったこと、故吏が故吏としての行動をするに際しても、そこに温度差があったことなどが諒解されるであろう。このことは故吏が故吏としての行動を取るか否かは、そのほとんどの部分が故吏側の意識によって決定されるものであったことを推定させるであろう。

以上に挙げたものは、いずれも旧君が王朝や賊によって誅殺されるという異常な状況のもとでの故吏の行動を示す事例であるが、注目されるのは旧君の通常の死の場合の故吏の行動についても、同様のことが想定されることである。事例を挙げよう。

『晋書』卷三三王祥伝に、

（王祥）泰始五年（二六九年）、薨じ、詔して東園の秘器、朝服一具、衣一襲、錢三十万、布帛百匹を賜る。・・・祥の薨ずるや、奔赴する者は、朝廷之賢に非らざれば、則ち親親の故吏のみにして、門に雜弔之賓は無し。

とある。この場合も、王祥の殯葬にすべての故吏が奔赴したわけではなく、「親親」の故吏、すなわち、とくに親しい関係にあった故吏のみが奔赴したことを示したものとされよう。また『梁書』卷二五周捨伝を見ると、

（周捨）起家して齊の太学博士と為り、後軍行参軍に遷る。建武中（四七九～四八二年）、・・・王亮、丹陽尹と為り、聞きて之を悦び、辟して主簿と為し、政事多く委ぬ。・・・梁台建ち、奉常丞と為る。・・・入りて中書通事舎人と為り、太子洗馬、散騎常侍、中書侍郎、鴻臚卿に累遷す。時に王亮罪を得て家に帰るも、故人至る有る者莫し。周捨独り旧恩に敦つく、卒するに及び、身ずから殯葬を営む。時人之を称す。

とある。これから周捨が王亮の故吏であったことが理解される。「故人」という文言には先述したように、故吏を含む場合があるわけであるが、この「故人」もそれに当てはまることになる。また『梁書』卷一六王亮伝を見ると、王亮は罪を得た後、その罪を許されて秘書監となり、通直散騎常侍を加えられ、ついで太常卿に遷り、さらに中書監に転じて、散騎常侍を加えられ、その職に死亡したと考えられるから、王亮の死は通常の死とされよう（死後、詔して錢三万、布五十匹が贈られているが、これは王亮の死が極通常のものであったことを示そう）。そうするとここでも、王亮の故吏がすべて殯葬を営んだものではなくて、周捨のみが、独りそれを営んだとする想定が可能となろう。

ちなみに、王祥や王亮の場合とは反対に、故吏が大挙して殯葬に奔赴する事例もある。『晋書』卷九〇良吏伝・曹攄に、

永嘉二年（三〇八年）、高密王簡、襄陽に鎮し、曹攄を以て征南司馬と為す。其の年、流人王逌等、軍を聚めて冠軍に屯し、城邑を掠寇す。簡、参軍の崔曠を遣りてこれを討伐せしめ、曹攄に令して曠を督護せしむ。曠、凶姦の人なり。攄を譎き前に戦わせ、後継と為るを期すも、既にして至らず。攄、独り逌と酈県に戦い、軍敗れて之に死す。故吏百姓並びに奔喪して会葬し、号哭して路に即き、父母に赴くが如し。

とあるのはそれを示している。また『南史』卷六四王琳伝によれば、陳初のこととして、王琳が淮南の八公山の側に権瘞された際、「義故」の会葬するものが数千人にのぼったとされるが、「義故」が故吏と互称されることを勘案すると⁽⁸⁾、これも同様の事例とされよう。

以上述べたように、旧君の服喪に関して故吏の行動に温度差が発現するのは、結局、故吏が故吏としてもつ意識の温度差に係わるものであって、後に述べることも併せて考えると、一般的に言って、基本的には現君と現臣との関係にあったときに、その関係がどのようなものであったのかということに係ってくるものと

考えられる⁽⁹⁾。そこでは当然のこととして、現君に対して現吏がより多くの恩義を懷けば懷くほど、故吏・旧君関係に入ったとき、故吏としては、より故吏としての意識が高まるということになる。したがって、現君と現吏時の関係が良好であればあるほど、旧君に対する服喪関係において、故吏により故吏的行動がより強く発揮されたとすべきものとなるということになろう。

二．西晋時代の故吏の旧君に対する服喪

まず越智重明氏が、西晋時代における故吏の旧君に対する服喪の状況をめぐって示す見解を見る。

越智氏は、漢魏時代、故吏が旧君の為に服喪することはまだ国家の制度化していなかったと思われるとし、その制度化は西晋時代においてであるとしている。その際、越智氏が論拠とする史料は『通典』卷九〇沿革五〇凶礼一二「齊縗三月」の条に、

晋武帝泰始中、尚書令史恂（本文姓欠）等是少府鮑融故吏。仮詣喪所、行服。散騎常侍何遵駁以為、『礼云、違大夫、之諸侯、不反服。則知之、天子亦不反服矣。恂等已登天朝、反服旧主。典礼相違。』荀闡表云、『礼臣為君斬縗三年。与子為父同。以進登天朝、絶無旧君之心、廢反服之礼、非所以敦風崇教。今使仕者反服旧君、於義為弘。』詔、（曰）『可。』

とあるものである。（下線及び下線部の（曰）は筆者が補ったものである⁽¹⁰⁾。）この記事を解釈して越智氏は、

ここで『違大夫之諸侯』、『違諸侯之大夫』（この『違諸侯之大夫』という文言はこの記事の前文にある。越智氏が意を以て補ったものであろう）といているのにあたる『故吏（一）（越智氏は、これを旧君を去って新たに他の官職についている故吏とする）』の仕え方は、当時の官僚としてごく一般的なことで

あろう、右に『詔（曰）可』とあるが、かくて『故吏（一）』の旧君への服喪は国家の制度となったことが知られよう。これはのちにもふれるが晋一代を通じて存していたと考えられる。なお、その服喪は『斉縵三月』である。

とし、西晋の武帝の泰始中（二六五～二七四年）の何れかの時期に、故吏の旧君に対する服喪が制度化されたとする。

さらに越智氏は、

(1)「故吏（一）」の旧君への服喪（のありかた）が、晋時代の制度上「故吏（三）（越智氏は、これを秀才・孝廉に察挙されたことのある故吏とする）」で現任の官僚たるものの挙将（旧君⁽¹¹⁾）への服喪（のありかた）と殆ど同様であったと思われる。

(2) その詔によって認められた服喪は「ごく大綱を示すにすぎなかった」、
「大体の原則を示したもの」、
「明確な規定をなすことはなかった」。

などとする見解を示している⁽¹²⁾。(1)についてはさして問題は無いと思われる。
しかし、(2)についてはいささか疑問がある。

まず、この服喪が「ごく大綱を示すにすぎなかった」、「原則的なもの」、「明確な規定をなすことはなかった」などとする解釈の意味するところは、後述するところからも、故吏の旧君に対する服喪は制度化はするが、「斉縵三月」と規定するかどうかについては未決定であるとするものであると考えざるをえない。越智氏がそのように理解する際、その論拠としたものにはふたつある。ひとつは、武帝の許可の後に、その詳細についてさらに議論が重ねられていること、もうひとつは、武帝の次の天子である恵帝の元康年間（二九一～二九九年）に、故吏が旧君のために「斉縵三年」の喪に服さないという事例が存在していることである。

後者の見解については後に触れることとし、前者の、詳細な議論がさらに続けられたということについてであるが、先の記事の『詔（曰）「可」。』とある部分に続いて、その議論が載せてある。いま、それを示すと、

重下礼官評考。尚書吳奮以為、『皆不応服。』尚書何禎議以為、『礼為貴臣貴妾，總麻三月。夫貴之施賤，猶論恩紀以制服。況嘗為臣吏，礼遇恩紀，優劣不同。焉可同之一例。今，辟举正職之吏，宜依古為旧君服。不論違適之異，皆齊縗三月，其余郡吏聞喪尽哀已。』衡陽内史曾璩議以為、『古者，失地之君，託身造次，感一時之惠，猶齊縗以報。嘗為臣吏。礼待優備。故依礼託情，而弘教訓矣。』とある。

この一連の『通典』の記載に対する越智氏の読み方についてはいささか疑問点がある。すなわち、この『通典』の記事の下線部は、『詔（曰）可』と読むべきものではなく、『詔曰「可重下礼官評考」（詔して曰く、「重ねて礼官に下し評考せしむべし」と）。』と続けて読むべきものであって、そしてそれに続いて、「礼官」，すなわち尚書吳奮以下による議論が行われたものとすべきである。（中華書局版『通典』もそのように読んでいる）

以上のように読むとすれば、この『通典』の記事には見られるように、さらなる議論の結果、この問題がどう処理されたのかについての記述は見られ無いから、この『通典』の一連の記述からだけでは、西晋の武帝の泰始中（二六五～二七四年），故吏の旧君に対する服喪が制度化されたとすることは困難であるということになる。そうするとそれは同時に、西晋時代の何時，故吏の旧君に対する服喪が「齊縗三年」と規定されたのかということ，もっといえば，故吏の旧君に対する服喪が制度化されたとすること自体が成立しないことになる。（奇妙なことに越智氏も「齊縗三月」と規定された時期に言及されていない。後述するように，武帝のつぎの天子である恵帝の元康（二九一～二九九年）以降のある時期にそのことを想定しているのかも知れないが，ただし，明記されていない⁽¹³⁾）

しかし幸いなことに，ここで『宋書』卷一五礼二を見ると，

漢・魏帝の喪親三年之制を廢するも，魏世或いは旧君の為に三年の喪に服す者あり。晋の泰始四年（二六八年）に至り，尚書の何禎，奏すらく，「故の辟举

の綱紀の吏、違適を計らず、皆な旧君に反服して齊縗三月」と。是に於いて詔書もて其の奏を下し、適く所貴賤無く、悉く同じく古典に依らしむ。

とある。これから武帝によりさらに議論を重ねることを命じられ、その結果、尚書の何禎の議が採用されて、「辟拏の綱紀の吏（故吏の中核をなす）」について、旧君の為に「齊縗三月」の喪に服することが制度化されたことが諒解されよう⁽¹⁴⁾。「適く所貴賤無く」というのは天子の直臣あるいは陪臣などを問わないという意味であろう。

なお、この規定は後に挙げる事例を勘案すると、旧君の死亡時、現に官に居ない故吏（越智氏はこれを「故吏（二）」という）についても適用されたものとして大過なからう。

このように見てくると、西晋の泰始四年（二六八年）に、旧君に対する故吏の服喪が制度化されたこと、しかもそれは「大体の原則を示した」ものでも、「ごく大綱を示すにすぎなかった」ものでも、「明確な規定をなすことのなかった」ものでもなく、「齊縗三月」と明確に規定されたことが知られるのである。

さて後述するところから、越智氏は旧君に対する故吏の服喪が「齊縗三月」と明確に規定されて以降は、西晋ではその規定がすべての故吏によって忠実に実行されたものと考えているようである。しかし、泰始四年（二六八年）に故吏の服喪が制度化され、「齊縗三月」と詔書によって規定されたにもかかわらず、以降にあって、必ずしもすべての故吏がこの規定通りに喪に服したわけではない。

すなわち、このことは、すでに小論で前掲した王祥の死亡（かれの死はすでに示したように泰始五年（二六九年）のことであった）をめぐって示された諸々の故吏の行動からも予想されることであるが、さらに、『通典』卷九九沿革五九凶礼二一「与旧君不通服議」の条をみると、

惠帝元康中、趙郡吏蘇宙不奔弔於郡将中郎関中侯曹臣移冀州大中正臣、以、『・・
・太学博士趙国蘇宙、昔先公臨趙、以宙為功曹。後為察孝。前臣遭難、宙為鎮

軍司馬。趙之故吏，有致身叙哀者，有在職遣奉版者。唯宙名諱不至。宙今典礼学之官，口誦義言。不可廢在三之義，於宙，必見論貶。』博士蘇宙，移国子博士，被符，下省請議，（蘇宙曰，『）郡将曹公，昔臨敝国。見接有布衣之交。高遊尽歡，謂千年可畢。不意，後会逼為功曹。尋被州召。為公察孝也。欲深其罪，崇飾虚名，以惑明時。宙雖不德，数受教於君子。寧有故将之喪，而忘奔赴之哀。過蒙殊恩，忝佐方岳，街命守制，無因致身，礼聞，父母喪，不得奔赴。為位，斂髮，成踏，襲經。割孝子之心，以終君命。謂之礼也。往聞喪，設位尽哀。仰則先哲，俯順王度。儀刑古典，不失旧物。若此為罪，不敢逃刑。聞凶，則因洛健步，書弔嫡孫。健步迴，說喪已還東阿，留書付其從子綜。宙尋被召，為博士。王事敦我，不遑啓處。．．．礼無臣祭君之文。時俗之所行，非先王之礼典也。庶子不得祭父。臣之祭君也，求之礼伝，無弔祭之文。』⁽¹⁵⁾

とある。先に恵帝の元康中（二九一～二九九年）に，故吏が旧君の喪に服さないという事件が起こったとしたのは，この蘇宙の事件のことである。

さてこの蘇宙は，越智氏のいう「故吏（一）」に相当することになる。これによれば，蘇宙が孝廉に挙げられたかどうかということについては，両者の言い分に違いがあるが，蘇宙が趙郡の功曹となったことに間違いはない。郡の功曹は先の何禎の上奏中に見える郡府の「綱紀」のひとつである。そうすると蘇宙は，制度の規定からいえば旧君の喪に奔赴すべきものとなるが，蘇宙は王事（太学博士としての職務）が忙しく，王事を守るために奔赴できなかったとしているわけである。これから西晋時代，すべての故吏が，旧君に対する服喪が制度化され，規定化されたといっても，それに従うものではなかったことが伺えよう。また上文によると，趙郡の故吏のなかには「致身叙哀者」もいたが，「在職遣奉版者」もいたことがわかる。このなかには蘇宙と同様に綱紀についていたものもあったであろう。このように見てくると，旧君の服喪についての故吏の行動は（服喪が制度化され規定化されて以降の）西晋時代にあっても，故吏自身の判断に応じて

区々であったということが想定されるであろう。

ところで『通典』では、この蘇宙の行動に対する論評が載せてあるが、こうした論評なかには、(州郡県の)長官と部下との間には、長官が外部から赴任してきて、短期間に転勤するから、それだけに恩義関係は成立しにくい。したがって、たとえば遠隔地で旧君が死亡した場合などでは、奔赴する必要はないとする意見が見えている。

国子博士謝衡議して云えらく、「……今の長官、皆な外より来たりて、一時を仮借して、共に相臨みて尹め、去れば則ち外に在りて、体遠く事絶え、恩は軽く義は疏なり。死亡に至りて、隔限するに路遠く、或いは難故有らば、時に往くを得ず。奔赴の義、犯す所無きなり。

とあるのがそれである。この謝衡は謝鯤の父のことであると思われる(『晋書』卷四九謝鯤伝)。また『晋書』卷四〇賈謐伝に、恵帝中に、(現行のものではない)『晋書』の記載を何時から始めるについての議論があったことを載せるが、その議論参加者の一人に国子博士謝衡の名が見えている。この謝衡と蘇宙の事件を議論した謝衡は同一人物とすべきである。そうするとこの蘇宙の事件に対する評論は西晋時代、しかも恵帝の元康中(二九一～二九九年)に、蘇宙の事件が生じてすぐに行われた蓋然性が高ものとされよう。

さらに、河内の太守であった孫兆も、蘇宙の行動を弁護する理由のひとつに、謝衡と同様の理由をあげている。

今の郡守内史、一時臨宰して、転移するに常無く、君は上に遷り、臣は下に易り、猶お都ての官、仮合して従事するがごときのみ。

とあるのがそれである。ただし孫兆については、その人物について不明である。

こうした、長官が短期間に転勤するから故吏と旧君の恩義関係は成り立ちにくいとする意見は、故吏の旧君に対する服喪に長官、部下の時代の恩義関係のありようが反映されるべきものとするものとする理解を示しており、小論の論述と関

連するところがあるので、注目すべきである。

その他この議論には、蘇宙の場合、一応弔いの文書を曹公の従子の曹綜に託したわけであるが、それで十分であるとする意見、蘇宙の行動を弁護し、王事を重視して、旧君の喪に奔赴する必要はないとする意見などが見えている⁽¹⁶⁾。

このように見てくると、現君と現吏の関係であった時期の有り様によっては、故吏が旧君の喪に服することを拒否することもあったと思われる。

果たして『通典』には、後文ではにさらに、同じく元康年間（二九一～二九九年）のこととして、

また南陽の張覲、太常に告げて、其の父、「昔、丹陽郡と為り、二臣主簿劉亶、留頌等有り。罪を理めて除名す。今、覲の父亡じ、居りて郡下に在るも、亶等来たりて喪に臨まず、また葬に奔らず。凡そ人に喪有らば、匍匐してこれを救う。況んや君臣の義においておや。而るに亶等、敢えて讐君の心を懷き、公に夷狄のことを肆にす」と称す。

とあり、その注に、

按ずるに亶、頌、太常に告げて、自ら理めて云らく、「近く陳事を為して犯忤し、鞭を加え獄に付さる。亶、留、黙然として放なたるを待つ。戮辱放退せられ、君臣の道絶ゆ。抱罪の人、敢えて靈柩を見ざるなり」と。

とあるが、これはそうしたことを想定させる記事とされよう。これによると劉亶と留頌は長官によって除名され、鞭討たれて獄に下されたことによって、君臣の義が絶たれたとして、故吏として旧君の喪に奔赴することを拒否したわけである。なお、郡の主簿も「綱紀」とされる官職である。

ところでこの劉亶と留頌は、越智氏のいう「故吏（二）」に当たると考えられるが、ここでは、そうした故吏も通常であれば、旧君の為に服喪すべきと考えられていたことが示されていることになる。これは泰始四年（二六八年）の服喪の制度化が、故吏一般を対象としたものとした先の推定を補強しよう。

ちなみに博士の馬平は、この劉亶と留頌の行動を擁護している。すなわち、馬平、議して云らく、「礼を按ずるに、君臣の道に合離の義有り。亶等、昔し君の棄てる所と為る。是れ義絶と為す。義絶の臣、其の自ら君に親しむを責めらる。已に放逐せられ、還りて親しく喪事に臨むことを求めらるるは、事に於いて則ち偽を為すに近く、礼に此の制無し」と。

とあるのがそれである。なお馬平については、その人物について不明である。

このように見てくると、西晋時代、故吏の旧君に対する服喪が泰始四年（二六八年）に制度化され、さらに「齊縗三月」と規定されたのであるけれども、長官と部下の時代の関係を問題にするという理由で、或いは故吏・旧君関係よりも王事を大事にするという理由（そこでも現君、現吏時代の関係が反映される可能性を予想することが可能であると思う。つまり、服喪を拒否することを目的として、王事が口実とされる場合のあったことを想定することも可能であると思われる）で、すべての故吏が服喪の規定を守るものではなかったことが伺えよう。つまり、制度の規定通りに「齊縗三月」の喪に服するかどうか、あるいは軽めの服喪ですますかどうかは、あるいは服喪自体おも拒否するかどうかは、故吏側の判断、換言すると、故吏の故吏意識の濃淡によって決定されるものであり、その濃淡は現君と現臣との関係にあった時、その関係がどのようなものであったかという事に大いに規定される性質のものであったことになろう。

以上述べたような状況は、東晋時代にあっても変化なことを示唆する事件があったことが、同じく『通典』のこの条に見えている。すなわち、

また梅陶、章郡太守と為り、孫虚、功曹と為るも、虚、怏々として欲せず。時に蜀賊偵邏有りて、誤まりて賊（偵邏）至ると為し、陶及び虚、皆な散走す。暁に賊の至るに非らざるを知り、悉く還る。陶、書佐の還るの晚きを大いに怒り、これを斬らんとするも虚、撓を執りて聴さず。陶、後邑を移り、虚、郡に詣りて自ら理し、陶を駁すること七事、（中略）太尉、虚を留めて従事中郎と

為し、復た陶と相聞せしめず。

とある。省略した部分に見える人名から、この記事は東晋時代のことを記したものである⁽¹⁷⁾。これは孫虚が主体的に、梅陶との間での故吏と旧君としての君臣関係を絶ったことを暗示させよう。そこでは服喪関係も絶たれたとすべきであろう。なお、郡の功曹が綱紀の吏であることについてはすでにふれた。孫虚は梅陶の死に遭遇したとしてもその殯葬に奔赴することはないであろう。『通典』が「旧君と服を通ぜざるの議」の条に挿入する所以である。

ところで、『通典』のこの条では、また続いて西晋時代、向雄が現君と現臣時代の関係のありようを問題とし、故吏と旧君としての君臣関係が生じることを拒否した事例を引いて、

温県領校（尉）向雄、犠牲牛を送るも、郡太守呉奮に呈せず。牛を送るに、天の大熱なるに値い、多く渴死すればなり。奮、雄を召して杖与えんとするも、雄、受けずして曰く、「呈せんとするも、牛また死せり」と。奮、雄を獄に下す。後に雄は黄門郎と為り、奮は侍中と為り、省を同じくするも相見えず。武帝、雄に勅して奮に詣らしむ。

とあるが、この経緯については『晋書』卷四八向雄伝に、もうすこし詳しい記述があり、それによると、

（向）雄、初め郡に仕え、主簿と為る。太守王経に事う。・・・後、太守劉毅、嘗て非罪を以て、雄を笞うつ。呉奮、毅に代わって太守と為り、又少譴を以て、雄を獄に繋ぐ。・・・（向雄）黄門侍郎に累遷す。時に呉奮・劉毅、俱に侍中と為りて、同じく門下に在り。雄初め言を交わさず。武帝これを聞いて、雄に勅して、君臣の好みを復させんとす。雄已むを得ずして、乃ち毅に詣り、再拝して曰く、「向に詔命を被るも、君臣の義絶ゆ。如何」と。是に於いて、即ち去る。帝、聞いて大いに怒る。向雄曰く、「我、卿をして君臣の好みを復せしむむに、何を以てか故に絶つ」と。雄曰く、「古の君子、人を進むるに礼を以

てし退くるに礼を以てす。今これ人を進むるに、諸れに膝を加えるが如くして、人を退くるに、諸れを川に墜すがごとし。劉河内、臣に於いて戎首と為らざるは、亦た幸甚なり。安くんぞ復た君臣の好みを為さんや」と。帝これに従う⁽¹⁸⁾。とある。この向雄と劉毅との間の関係は、向雄と呉奮との間ににも当てはめられるであろう。向雄は劉毅のみならず、呉奮に対しても故吏と旧君としての君臣関係を拒否したことを示したものとなろう。そして、その関係が現君と現臣時代の関係に規定されることを示したものともなろう。この向雄と劉毅・呉奮との間には、服喪関係は発生しないであろう。少なくとも向雄は、劉毅、呉奮が死亡したとしても、その喪に服することはないであろう。『通典』がこの事例も「旧君と服を通ぜざるの議」の条に挿入する所以である。

なお、この向雄と呉奮との間に起こった事態について、西晋時代から東晋時代にかけて生きた人である王隱（『晋書』卷八二本伝）は評論して、故吏と旧君の現君、現臣との時の関係を重視して、向雄の行動を是としている。

王隱議して曰く、「礼に『君、君たらざるも、臣、以て臣たらざるべからず』と云うと雖も、当に小惡と為すべきなり。三たび諫めて従わざれば則ち去り、其の君に齒されざれば、則ち敢えて其の朝に立たず。仲子の『人、国士を以て我を遇さば、我、国士を以てこれに報ゆ。人、凡人を以て我を遇さざ、我、凡人を以てこれに報ゆ』と称する如きに至る。これ猶お戎首より輕きも、則ち逢うべくしてこれを避け、死に至りて往かざるも可なり。雄、詔勅を無して逢い避くるも、未だ非とすべからざるなり」と。

とあるのがそれである。こうしたことは制度の存在があつたにしても、西晋時代と東晋時代とで、人々の故吏が旧君の為にする服喪についての考え方にさして異なるところが無かつたことを示唆するものではなかろうか。

三．東晋時代の故吏の旧君に対する服喪

越智氏の、ここでは、東晋時代の故吏の旧君に対する服喪をめぐる情況に関する見解を見る。

『通典』卷九〇沿革五〇凶礼二一「齊縗三月」の条に、

(a) 国子祭酒孔愉議、「応従弟子服師之制。昔、大夫既喪。門人若喪父。而無喪。弔服加麻。今縦不能爾。自宜三月、加以環絰。未聞深衣之制。自給布衣是今之吉服。君弔其臣、猶錫縗。況臨故君而可奪情服乎。」

(b) 范汪議、「当今、刺史郡守幕府事任、皆重与古諸侯不異也。按、漢魏名臣為州郡吏者、雖違適不同、多為旧君齊縗三月。」

(c) 范寧議云、「弔服加麻、輕末之服。臣為君服斬縗。旧君齊縗三月、此古今所以得異。寧謂、臣有貴賤、礼有殺降。州郡綱紀察舉辟命之吏、聞旧君喪、應即奔赴、在官之人亦宜棄職而去。雖不皆与礼合、称情立文也。」或曰、「州郡守牧喪、官吏為之齊縗、以終葬。故、服旧君總麻、所以為輕重之殺也。臣為君服斬、三代之達礼。秦罷侯置守、雖不繼位、皆有吏臣、不得准古諸侯也。」

(d) 或曰、「州郡守牧喪、官吏為之齊縗、以終喪。故、服旧總麻、所以為輕重之殺也。臣為君服斬、三代之遺礼。秦罷侯置守。雖不繼位、宿有吏臣、不得准古諸侯也。」

(e) 虞道恭問曰、「旧君齊縗三月。今見為人吏、旧君喪、今同在此。未知、礼猶得服不。」徐邈答曰、「若更仕一君、便絶前君。足下、疑於今為人吏、是也。吾謂、仕者、以後絶前邪。正、使仕於此君之朝、而違前君、亦何不可。況為前君服旧君服也。」((a), (b), (c), (d), (e) は越智氏による)

とある。越智氏はこの記事に見える孔愉が国子祭酒であったのが東晋初期末のことであり、范寧、徐邈が東晋中期末ごろの人であるから、この記事が東晋時代の

ことを記したものとして、主に (c) の范寧の議論を中心に考証を加えている。

考証の結果は大要以下のようなものである。

これは東晋時代の故吏の旧君に対する服喪の現実的情况を示したものである。

すなわち、故吏（「州郡綱紀，察挙辟命之吏」）が（現に官に居ると居らずとにかかわらず）すべて規定通りに「斉縗三月」の喪に服するのではなく、服喪を軽くすませるために軽末之服である「弔服加麻」，そして斉縗よりも軽い「緦麻」に服するものがあるのが現実であった。

としている。さらに (b) の記事を、

范汪が「（東晋になると故吏の）旧君の為にする服喪が漸く制度より軽くなったのをなげいて、制度のなかった漢魏時代でもその名臣は多く（晋時代の制度のような）斉縗三月の喪に服したのであるから、まして制度上そうきまっている現今そのようにあるべき」を述べたものとされるのであろう。

としている⁽¹⁹⁾。基本的には賛成のできる考証であると思われる。しかしすでに見たように、西晋時代においても、制度の存在があったのにもかかわらず、現実的には故吏の服喪のあり方は区々であったわけであるから、この『通典』の議論を以て西晋時代に比較した際、東晋時代にあつて、故吏の服喪の情况自体が軽いものとなったとする結論を引き出すのは困難ということになる。

おそらく先に述べたように越智氏が、西晋時代のある時期（それは当然、越智氏の論旨に随えば、恵帝の元康年間（二九一～二九九年）より以降のある時期となるが）に故吏の旧君の為にする服喪が「斉縗三月」と規定され、それ以降、すべての故吏が規定通りに「斉縗三月」の喪に服したと想定したことから、こうした結論を引き出したのであろう。

このように想定されるのは、越智氏が、西晋の泰始中（二六五～二七四年）に故吏の旧君に対する服喪の制度化ということに言及して、その制度化が「服喪の大体」，「服喪のごく大綱」を示したものにすぎず、さればこそ、後世の元康年間

(二九一～二九九年)に旧君の為に故吏が服喪しないなどという「蘇宙のような事例が生じるはずはない」とするところに、それは端的に示されているのである⁽²⁰⁾。これは逆にいうと、旧君に対する服喪が「斉縯三年」と制度的に規定されると、すべての故吏がその規定に素直にしたがうものであるとする思考が、その背景にあるからであろう。しかし西晋時代にあっても、故吏の行動が必ずしも制度の規定通りではなかったことはすでに述べたとおりである。越智氏自身も、「范寧の議論は故吏の服喪の現実の状況を述べたものであるである」といっているように⁽²¹⁾、西晋時代であれ東晋時代であれ、すべての故吏がいつでも制度の規定通りに行動するとは限らないのである。

いずれにしても、実際には東晋時代においても、先に西晋時代について示したと同様に、旧君に対する服喪のありようは故吏個々の判断に基づくものであり、そのあり方には区々なものがあつたこと、その差異は現君と現臣時代の関係に大きく規定されるものであつたことなどが想定される。したがってそこでは、西晋時代と東晋時代とで、現実に故吏が旧君の為にする服喪の実情に軽重があつたとする結論を引き出すことには無理があるということになるのである。

要するに、私的情誼関係の発露ということをめぐって、西晋時代に比べて東晋時代に故吏一般の行動が色あせたものとなったとするのには無理があると考えざるを得ないのである。

四．東晋時代における故吏の立碑

以上のように見てくると、ここで注目されるのは東晋王朝が、この故吏・旧君間に見られる私的情誼関係の発露ということを西晋王朝よりもむしろ推奨するがごとき政策をとったふしがあることである。すなわち『宋書』卷二礼二を見ると、漢以後、天下、死を送るに奢靡にして、多く石室石獸碑銘等の物を作る。建安

十年（二〇五年）、魏武帝、天下雕弊せるを以て、令を下して厚葬を得せしめず、又碑を立つるを禁ず。魏の高貴郷公の甘露二年（二五七年）、大將軍參軍太原王倫卒す。倫の兄俊、表徳論を作り、以て倫の遺美を述べて、云えらく、「王典を祇畏し、銘を為るを得ず。乃ち行事を撰録して、就きて墓の陰に刊みて爾るを云う」と。此れ則ち碑禁尚お厳なり。此の後、復た弛替す。晋武帝の咸寧四年（二七八年）、又詔して曰く、「此の石獸碑表、既に私に美を褒め、虚偽を興長し、財を傷ない人を害すること、此れより大なるは莫し。一にこれを禁断せん。其の犯す者は、赦令に会うと雖も、皆な当に毀壞すべし」と。

とある。これから西晋時代、死者の為の石獸や碑の建立が、私に死者を賞美するものであるという理由と、それが民間に経済的負担を強いるものであるという理由で、朝廷から禁止する意向が示されていることが知られるのであるが、しかし東晋になると、この立碑が朝廷によって容認されることとなる。すなわちこの後文に、

元帝の太興元年（三一八年）、有司奏すらく、「故の驃騎府主簿、故恩もて旧君顧榮を葬り、碑を立てんことを求む」と。詔して特に立つるを聴す。是れより後、禁又漸く頽る。大臣長吏、人皆な私に立つ。

とある。これから、東晋王朝は、故吏が旧君の為に立碑したいとする要求を容認しこと、その容認を契機としてこうした立碑の禁止が廢れていったことがわかる。この措置は、東晋王朝が、民間に経済的負担を与えることを承知しつつも、故吏の故吏としての情誼を示すことをむしろ表彰するようになったことをも示したものとなろう。そこでは故吏たる官人が職務特権を行使して立碑の費用を民間に転嫁するといったことも往々あったであろう。

これは換言すれば、東晋王朝という政権が故吏・旧君の間の私的情誼の発露ということを行政効率よりも重んじるという方向に傾いたことを示したものとなる。

むすびにかえて

小論で述べたこと、あるいは述べようとしたことの概要は以下のようなものである。

- (1) 故吏の旧君に対する服喪が制度化され、それが「斉縗三月」と規定された時期について、越智氏は明確にされていないようであるが、その時期は西晋の武帝の泰始四年（二六八年）のこととすべきである。
- (2) 東晋時代になると、西晋時代に比して、故吏の旧君に対する服喪の実情が制度の規定よりもようやく軽くなる傾向にあると解釈するのは困難がある。西晋の泰始四年（二六八年）にその服喪が制度化され「斉縗三月」と規定された後、西晋時代にあっても故吏の旧君に対する服喪行動には区々のものがあり、故吏になかには、制度の規定通りに服喪する者もあれば、軽めの服喪で済ます者もあり、さらには服喪しない者もあった。そしてその実情は越智氏の指摘するように東晋時代にあっても同様であった。したがって、西晋時代に比して、東晋時代になると故吏の旧君に対する服喪がようやく色あせたものになったとすることは困難である。
- (3) このように、故吏の旧君に対する服喪行動に相違が見られるのは、服喪するかどうか、あるいはどのような喪に服するかの判断主体があくまでも故吏の側にあったからであり、その行動は現主と現吏であった時の関係に規定されると考えられる。
- (4) 東晋王朝は、こうした故吏と旧君との間に見られる私的情誼関係の発露を、行政効率を犠牲にしてまで称揚しようとする性格をもつ王朝であったと考えられる。

最後にこれらを踏まえて若干のことに言及し、小論のむすびにかえることと

する。

故吏・旧君関係、門生・師関係にみられる私的情誼関係と並んで、魏晉南朝時代の政治・社会を考えるうえで大きな問題となるもう一つの私的情誼関係に、父子間の関係を代表とする、「孝」をめぐるものがある。この親族間の私的情誼関係は、魏晉南朝時代の選挙制度の根幹を構成する九品官人法の運用に取り入れられている。それを象徴するのが「郷論」・「清議」の存在である。

「郷論」、「清議」とは士人による人事をめぐる輿論であり、それは儒教的名教を中心として行われるものである。その中核は「孝」の問題である。そこでは、「不孝」とされる行為は官人の地位に大きな作用を及ぼすことが明らかにされている。官人たる士人や、官人候補たる士人が「不孝」とされる行為を行った際、「郷論」あるいは「清議」の名によって官人資格たる郷品の引き下げ、剥奪或いは不与などの処分が科される。郷品が与えられなかったり、剥奪されたりすると原則的にはそのものは官人となることは出来ないし、引き下げられると、その低い郷品に応じた官職にしか就けなくなる⁽²²⁾。

こうした「清議」・「郷論」に対する天子の支配権力の介入力は、当該時期、時代が下るにしたがって減退して行き、その減退は東晉時代にピークを迎えると考えられる⁽²³⁾。

以上のような「孝」の選挙制度への取り入れと、その後の推移に連動すると思われるが、筆者は先に東晉王朝という政権は、士人による「孝」の実践が全うされるためには、基本的に行政効率さえも犠牲にする性格を鮮明にもつ政権であることを主張した⁽²⁴⁾。小論で述べたことが幸いに大過ないとすれば、上記の(4)は、当該時期、故吏・旧君関係にいたものの大部分が士人である以上、また故吏が旧君に対して君臣関係にあると判断した場合、旧君の恩義に報いることを当然とし、さらには、その報恩行為が賞賛される世の中である以上、先稿で述べたことと連動するところがあるとすべきである。

〔註〕

- (1) 川勝義雄「門生故吏関係」（『六朝貴族制の研究』第Ⅱ部第5章 岩波書店 一九八二年）参照。
 なお、「王法」についてもこの論考を参照のこと。
- (2) 越智重明「晋南朝の故吏」（『東洋史学』一七）・「再び晋南朝の故吏について—貴族制に関連して—」（『東洋史学』二一・二二）・「晋時代の喪服」（『魏晋南朝の貴族制』第三章第五節 研文出版 一九八二年）参照。
- (3) 前掲「門生故吏関係」（二八一頁）参照。
- (4) 前掲「門生故吏関係」（二八六～二八七頁）参照。
- (5) 前掲「晋時代の服喪」（一三四～一三五頁）参照。
- (6) 前掲「故吏門生関係」，「晋南朝の故吏」参照。
- (7) 前掲「門生故吏関係」，「晋南朝の故吏」参照。
- (8) 前掲「門生故吏関係」参照。
- (9) 前掲「門生故吏関係」参照。
- (10) 中華書局版『通典』による。
- (11) この「拳将」は「旧君」にふくまれる。なお，前掲「再び晋南朝の故吏について—貴族制に関連して—」参照。
- (12) 前掲「再び晋南朝の故吏について—貴族制に関連して—」参照。
- (13) 前掲「再び晋南朝の故吏について—貴族制に関連して—」参照。
- (14) 綱紀については，宮崎市定『九品官人法の研究—科举前史—』補注②①・②⑦（五六九頁・五七〇～五七一頁 東洋史研究会 一九七四年）参照。
- (15) 前掲「再び晋南朝の故吏について—貴族制に関連して—」参照。
 「趙郡吏蘇宙不奔弔於郡将中郎関中侯曹臣移冀州大中正臣，以，」とある部分は，中華書局版『通典』では，「趙郡吏蘇宙不奔弔於郡将，中郎，関中侯曹臣移冀州大中正，『臣以・・・』」と読んでいる。
 「（蘇宙曰，『）」は越智氏が意を以て補ったものである。この部分は中華書局版『通典』では，「博士蘇宙移国子博士，『被符下省請議。郡将曹公，・・・』」としている。
- (16) 弔いの文書を従子に託しているので充分とするものは，博士周衷の議論で，
 苟能致書唁，弔祭闕之可也，
 とある。
 王事を重視し，旧君の喪に奔赴する必要はないとするものは，河内太守孫兆の議論で，
 又当故将（旧君＝筆者）未殯葬，已受天子肅命之任，王事敦我，密勿所職，
 詩不云乎，『王事靡盬，不遑将父』，夫繫之情，猶不得将養父母，而況遠赴弔祭故将乎，其議貶者，可謂行人失辭，
 とある。

- (17) 中略とした部分に戴邈の名が見える。戴邈は東晋時代に活躍した人物である（『晋書』卷六九本伝）。
- (18) 『晋書斟註』は劉毅を劉準の誤りとするが、小論の論旨に直接影響を及ぼすものではないので、劉毅として議論を進める。
- (19) 前掲「再び晋南朝の故吏について－貴族制に関連して－」参照。
- (20) 前掲「再び晋南朝の故吏について－貴族制に関連して－」参照。
- (21) 前掲「再び晋南朝の故吏について－貴族制に関連して－」参照。
- (22) 越智重明『清議と郷論』（『東洋学報』四八―一），拙稿「両晋南朝の天子の支配権力と清議・郷論」（『古代文化』五四―一）参照。
- (23) 前掲「両晋南朝の天子の支配権力と清議・郷論」参照。
- (24) 拙稿「東晋時代における孝と行政」（『九州大学東洋史論集』三二）参照。

小論は平成一七年度久留米大学大学院共同研究「流域圏の文化と社会に関する比較文化的研究」の成果の一部である。